
サン・ドミノ

咲染 アイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サン・ドミノ

【Nコード】

N4321U

【作者名】

咲染 アイト

【あらすじ】

大陸トールライトのとある国、バレンダン。

この国には、魔物や魔族といった種族がはびこっている。だが、人々はそれに恐れをなすことはなかった。人々は未だ、バレンダンに住んでいる。

何故かって？

サン・ドミノがいるからだ

現在更新凍結中。

序章 始まりの塔（前書き）

はい、新しい小説です。

探偵と助手は街を往くがまだ全然完結してないのになぜ投稿するかって？

今投稿しとかないと、色々回収しきれないからさ。

序章 始まりの塔

それは、突然現れた。

大陸トールライトのとある国、バレンダン。

その国には、「魔の森」と呼ばれる森があった。

その森を抜けた少し先。

めったに人がやってこないその平地に、あれが現れたのだ。

すなわち、塔が。

それは、現れたと呼ぶに相応しい出現の仕方だった。

なんの前触れも無く、唐突に、音も立てずに出現したのだ。

まるで今までそこにあっただかのように平然と構えるその塔は、なんの飾りつ気もなく、また恐ろしさもなく、ただただ質素な外見だった。

それ故に、見る者に一首の虚無感すら与えた。

その塔は、全てを変えた。

序章 始まりの塔（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

サン・ドミノ(前書き)

本編はここからです。

設定がイミフなところがありますが、それはきっと次回公開・・・
すると思います。

サン・ドミノ

「今回の任務を確認するぞ。」
「了解。」

ルイの声に応えるライドの声が、崖の中腹あたりで小さく消える。

ルイとライド。

彼らは今、大陸トールライトの一国、バレンダンの北の方に位置する切り立った崖の下に来ていた。

普通、崖と言えば下には川や海があるというイメージがあるが、二人が来ているのはそのどちらでもなく、ただ、平地が広がっているだけだ。

彼らがなぜそのような場所にいるのか？

それは、サン・ドミノの任務があるからだ。

サン・ドミノとは、会社とギルドを足して二で割ったら五余ったような組織である。・・・まだ割れる気がするのはいきつと気のせいではないだろう。

基本的な活動は、サン・ドミノにきた依頼を遂行することである。以来の内容は、魔物や魔族といった種族の討伐がメインである。

これだけならただの傭兵が集まっただけの組織だが、会社のように地位もある。

サン・ドミノのおかげでバレンダンは平和だった。

そこに、塔が現れた。

魔の森の先に出現したその塔は、魔の森に入らずとも、（もつとも、進んで入るものなど滅多にいないが）、バレンダンの都市部からでも見る事ができた。

塔の出現に人々は、驚きこそしたものの、もともと魔物や魔族をよく見る国のため、害がないようであれば、そのうち対処しよう、ぐらいの気持ちでとりあえず重要視しなかった。

なったのだが。

人々はすぐにその考えを改めることとなった。

塔からの直接的な害は確かになかった。

しかし、塔の出現前とは明らかに変わったことがあった。

なんと、バレンダンの森や林、とりわけ魔の森の魔物や魔族が急増したのだ。

当然、サン・ドミノもそのような報告を受けてから、塔の調査や攻撃を試みてはいる（サン・ドミノは、自主的な魔物討伐や、魔族が絡んでいる事件の解決もする。その場合、報酬を出すのは政府である。）。

が、塔により増えた魔族たちの対応に手いっぱい、そこまでは余力がなかった。

おまけに、塔の周りには結界が張られていて、人間は通ることができないのである。

人々から「魔界塔」と呼ばれるその塔の直接的な動きは、未だない。強力な破壊魔法を唱えるのではないかとか、人類に幸福をもたらすのではないかとか、塔を見たものは、必ずそれを話の種にしていた。

・・・と、ここまで長々と塔の話をしてきたが、実は自分たちの任務は、塔とは関係ない、とライドとルイは思っている。
なぜなら・・・

「今回の任務は、街をひとつ滅ぼした人間の討伐だ。」

そう。

敵は人間なのだ。

ちなみに今の確認では、任務がとても簡単に言われているが、これはあくまでもスピードを重視した確認で、本当は様々な資料や情報などがある。

そして、今回の任務は特異である、とも言える。

サン・ドミノの基本的な活動は、「魔物や魔族」の討伐だからだ。

「しかし・・・少し疑問が残る。」

不思議そうにいうルイに、ライドもまた、別の種類のきよとんとしたような顔で返す。

「疑問？」

「ああ、実はな、塔の調査をしていたマターによると、今回の討伐対象が、塔を出入りしていたらしい。」

「ナ、ナンダッテー」

ライドは明らかにわざと大きくのけぞり、驚いてみせた。

ライドの反応はともかく、その驚きが意味するところは明白である。もし本当にそれが普通の人間だったとしたら、塔の周りの結界によって、そもそも塔に入ることすらできないのである。

もつとも、今はデータが少なすぎる。

今いくら考えても進まない。

ルイはそう思い、頭を上げ

ルイが気づくのと、銃声がほぼ同時だった。

サン・ドミニノ(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

ゾンビゲーとか、大変だよな。（前書き）

キャラ紹介

ライド・シルベスター 男 18才

この本の主人公。サン・ドミノの実活動員であり、使う魔法は「波動」
いつも周りにふざけているような印象を与えているが、真剣になるとなかなか強い。

ゾンビゲーとか、大変だよな。

さて、ここで一旦状況を確認しよう。

二人は崖の下にいる。

そして二人は、岩陰に隠れている。

討伐対象がいると思われる、洞窟の前にいる警備兵たちから隠れていた。

岩の端ギリギリに隠れていた二人は、敵の動向を探りつつ、任務を確認していた、というわけだ。

岩は崖に接しており、崖側にルイ、道側にライドがいた。

ロード○ンナー的な道を想像してもらえればいいだろう。

そこでライドが、大きくのけぞった。

敵兵が、岩陰から見えるライドの顔を見つけ、持っていた銃を発砲するまでに、時間は掛からなかった。

- - -
- - -
- - -

ルイは内心舌打ちする思いで、しかし落ち着いて魔力を作動していた。

そして、

「アイスシールド。」

一声つぶやくと、ライドの壁に氷の壁が出現する。

- - -
- - -
- - -

ちなみに、アイスシールドとは、名の通りの技なのだが、技名を言う必要は全くない。

ルイいわく、「読者への配慮」だそうだ。
決して文字数稼ぎではない。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ルイは、発泡された瞬間、魔法で水を生み出し、それを壁の形にし、さらにその温度を氷点下まで叩き落とすという作業を、時速約300キロの弾丸がライドを仕留める前にやってのけたのだ。並みの魔導士にできることではない。

ルイは一回ため息をつき、とりあえず今すべきことをする。

「おい、ライド、そんなに死にたいなら手伝ってやろうか。」

「余計なお世話だ。・・・っか、なんなんだよ、あいつら。おれらがただの宅配便業者だったら、今頃『返事がない、ただの屍のようだ』とかいうテキストが出てるところだったぞ。」

「どこのドラクエだ。そして、こんな洞窟に、何を宅配するつもりだ。っつか、コルト・ポケットで足を撃たれて、死ぬ奴がいるなら紹介してくれよ。」

「さすがルイ、すべてのポケに突っ込み返すとは」

「ハイハイ分かった分かった。」

二人はそんな話をしながらも、敵からの第二撃を警戒する。

否。

二発目は愚か、敵はこちらに注意を向けることすらしていない。

影になって二人の姿は見えないとはいえ、先程の弾丸が埋まった、見るからに怪しい氷壁があるのだ。

どんなに頭の悪い人間でも、威嚇射撃か、氷壁を調べに来るかくらいはするだろう。

しかし実際、敵はまるで何事もなかったかのように再び見張りを続けている。

二人が妙に思うのも、無理はない。
もつとも、ルイは何か思い当たることがある様子で、再び魔法を發動している。

そして、またたく間に短剣を作り出し、構える。
短剣を「作る」といつても、正体はあくまで水なのだが。

ルイの魔法は、水の「形」を変え、「温度」を変え、「硬度」を変え、さらには「色」を変える。

しかし、それはある程度まとまった水でなければできないのであり、例えば雨をひょうに変えたりは出来ない。

ちなみにルイは、水を操り、動かすこともできる。

ともかく、ルイはその剣を手のスナップだけで素早く投げる。

その短剣は、吸い込まれるようにして、敵兵の足に刺さる。

当然、血が吹き出て、敵は苦痛の声を上げる。

というようなことはなく。

その兵は、軽くバランスを崩したものの、特に表情も変えずに、足の短剣を刺したまま見張りを続ける。

「あそこにいるやつら・・・あいつら全員、ゾンビだ。」

「ゾンビ?・・・って、別にそんなグロい外見してないが。」

「ゾンビに謝れ。ゾンビ＝グロいという式を立てたことに対して俺と全世界のゾンビに謝れ。」

「なんで!？」

「ゾンビは筋力と体力はあるものの、素早さと知能はゴミだ。俺のシールドを見て何もしないのも、足に剣刺さって平気なもの、これで説明がつく。」

「スルーかよ。つーかルイの方がひでーよな。お前がゾンビに謝れ。」

「敵は・・・6人か。」

「おーい。ルイ帰ってこーい。」

「ひとり三人倒す計算だ・・・余裕だよな？」

「・・・ああ・・・。」

そう言って、ライドは剣を構える。

そして、ルイはシールドを解き

二人は、敵の中心へ躍り出ていった。

シールドを解いてやって来た二人を見て、今更ながらにゾンビたちは銃を向ける。

が、ゾンビのスピードで二人を捉えられるはずもなく、六つの弾丸は二人に命中することはなかった。

ライドは、ゾンビの発砲にも全くひるまず、走る速度を変えずにゾンビたちに近づいていく。

そして、やっと二発目を撃とうとしたゾンビのうちの一体に、剣を振り下ろす。

ライドとて、人外のを斬るのは初めてではない。

そもそも、人外のものが本来の敵なのだから。

だが、今回の敵はあまりにも異質だった。

というのも、ライドが敵を斬ったその時、確かに彼は敵を捉えた感触を手に感じた。

しかし、次の瞬間

ライドの剣は、空を斬った。

今この瞬間まで目の前にいた敵は、
空気がぶれるような音を立て、
消え去ったのだ。

ゾンビゲーとか、大変だよな。(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

最初の敵っていろいろのは、あっさり倒されるものなのです（前書き）

久々の更新です。

遅くなってすみません。

キャラ紹介

ルイ・ローレンス 18才 男

サン・ドミノの実活動員。

使う魔法は「水」。

水を操り戦う。

常に冷静、頭がいい。

DS。

最初の敵ってというのは、あっさりと倒されるものなのです

「!?!」

ライドは、混乱の中、視界の端に敵を確認する。

全く理解できない状況下においても、ライドは、なんとかその敵に手をかざし、不可視の波動（ライドの魔法で、形を変えて実現することもできる）を放ち、倒すことに成功した。

しかし、倒すといっても、実際に倒れたところを見たわけではない。一体目と同じく、攻撃が当たった瞬間に消えてしまったからである。とはいえ、さすがにライドも落ち着いてきて、とりあえず今は謎を解くよりも、残ったゾンビを倒すことが先決である、ということを考える余裕もできた。

それと同時に、ライドは大きく跳躍する。

ほぼ同時に、ゾンビが引き金を引いているが、その弾丸はライドの足を軽くかすめただけで、直撃するにはいたらない。

ライドはそのまま敵の後方に着地し、剣を振り上げ・・・

そこで、敵は消えた。

攻撃前に消えたということ、パターンこそ違えど、先程のようには慌てない。

が、ライドは、これからの任務に一抹の不安を覚えた。

今のゾンビは、おそらく召喚されたもの。

ゾンビは魔法を使わないから、召喚者がゾンビを帰還させたのだから。う。

だが、普通召喚札「リリングカード」（魔法。魔界より魔物を召喚する。）を使う場合、召喚にも帰還にも時間を要する。

それを、俺の動きを見た直後に魔法を発動し、斬り終える前に帰還させたのだ。

魔力が高いことは、疑いようがない。

もっとも、人一人で街を滅ぼすくらいの人間なら、これくらい普通

なのかもしれないが。

そんなことを考えつつ、ルイの方を見る。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ゾンビの弾丸が放たれたとき、ルイは魔法を発動していた。

そして、危なげもなく弾丸をよける。

といっても彼が自ら動いたわけではない。

発動直後地面から生えた（という表現がこの場合正しい）氷の壁が、

ルイを持ち上げ、結果的にその氷壁に弾丸がぶち当たったのである。

「残念だったな。」

それだけ言って、腕を振る。

「アクアプリズン。」

次の瞬間、ゾンビたちの体は、水に包まれていた。

が、直後ゾンビはきれいに消えた。

ルイは少し表情を変えたものの、すぐに納得した様子でライドの方
向に向き直った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「ライド、時間かかりすぎじゃないか？」

「お前があっさりしすぎてんだろ。何？塩分を抑えているの？だから
そんなにあっさりしてるの？」

そんな会話をしつつ、ゾンビが消えた方を見る。

「それよりも・・・、見たか、あれ。」

「ああ。面倒なことになりそうだな。」

ライドは、敵についての自分の見解を話した。

ルイは概ねそれに賛同した様子だったが、周りを見回し、舌打ちを
つけた。

「小賢しい・・・。」

そう言つて、洞窟の入口にあつた像に近づく。

その装飾がどうかしたか、とライドが言いかけたが、その前にルイが行動を起こした。

像を、叩き割つたのだ。

「ルイ、それおかしくない？ 違くない？ いくら敵でも普通人の装飾叩き壊す？」

「これを見てみる。」

そう言つてルイが手を出すと、手には何かの破片が入っていた。よく見ると、カメラのようである。

「カメラの破片だ。さっきのゾンビはあれ、俺たちの情報を収集するための罠だつたらしいな。」

「どういう……。」

「最初からおかしいとは思つてたんだ。街一つ占拠できる奴が、なぜゾンビなんかを召喚したのか。」

そこまで聞いて、ライドがストップをかける。

「え、ちよつと待つて、占拠つてどうということ？ 冒頭で滅ぼした、とか言つてなかつた？」

「似たようなもんだろ。」

「いや、おかしいだろ、似たようなもんじゃないだろ。」
ライドの反応も、もつともである。

「いや、お前が敵と対峙したときになんか間違えないかなと。敵の前で大恥かいてくれないかな、と。」

「ひでえ！」

「うるせえ。話を続けるぞ。」
そう言い、強引に話を戻す。

「ゾンビは、魔法でなくとも銃なんかがあれば倒せる、下級の魔物だ。それなのにあれを選んだということは、もともと勝つつもりじやなかつたんだろうな。下級とはいえ魔物である以上、魔法を使うことになる。それを、このカメラで見えていたわけだ。敵の武器が、銃か魔法か、そしてどんな種類か。」

「なるほど。だが、その場合俺たちは不利じゃないか？」

「ライド、何でも自分の感覚で物事を捉えるのはやめろ。俺は資料を読んでるんだから、敵の情報くらい知ってるに決まってんだろ。つーか任務に資料読まずに来るとか舐めてんのか。」

罵声の嵐に、さすがのライドも何も反論しなかった。

手から破片をパラパラと落としながら、ルイは言う。

「そろそろ、入るか？敵も待ってるだろ。」

「あ、ああ……。」

「それから、あっちの像にもカメラあるから。さっきまでの醜態敵に見られてたから。」

「やっぱひでえ！」

そして二人は、闇に溶けていった。

最初の敵っていろいろのは、あっさり倒されるものなのです（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

洞窟と松明はよく似合っものなのです。(前書き)

最近、文字数が短くなってきてる気が。
大丈夫かな、俺・・・。

追記

名前のミスを発見、修正

洞窟と松明はよく似合うものなのです。

カッーン、カッーン・・・
くらい道に、足音だけが響く。

周りの壁にはご丁寧たいまつに松明が置いてあるが、それだけでは洞窟の中は照らしきれていない。

決して短くはない洞窟を、言葉もなく歩くルイとライド。

洞窟の中では音が響き、声を出すと敵に気づかれるから、というわけではない。

単に、敵の大元を前にして緊張しているだけである。

もともと洞窟の入口付近で、ライドが足音をたてないようにしていたのだが、「俺たちの侵入なんて気づかれてるに決まってるだろ、馬鹿が」というルイの一言で、それをやめた。

カッーン、カッーン・・・

退屈に続く道に二人が飽き始めてきた頃、光が見えてくる。

「出口、ではないな・・・。」

ルイがつぶやく。

二人はそのまま光に近づいていく。
が。

突然、二人が止まる。

「この奥から」

強力な魔力を感じる、というあとの言葉を飲み込むライド。
だが類もそれを感じたようで、辛苦の表情を浮かべる。

「これは、面倒な任務になりそうだな・・・。」
誰に向けてでもなくつぶやく、再び歩き出す。

それから、しばらくして。

「やっと、ご対面か。」

光の根源までたどり着いた二人は、敵の姿を見る。だが、こちらに背を向けていて、よく見えない。かわりに、部屋となつているこの洞窟内の大広間を見る。どうも行き止まりらしいこの場所は、道と同じく、松明がある。それだけではなく、光を放つ水晶が、部屋を明るく照らしている。それ以外には置いてあるものはなく、殺風景な広間である。そこまで観察して、部屋の中に変化が起こる。敵が、振り向く。

「待つてたぞ、ルイ、ライド。」

「お前は　　クリア・ノーランド！」

二人の声が、重なる。

「まさか、君たちが来るとはな。私のことは、わかるだろう？」

「なぜ、あなたが・・・何をしている！？」

敬語になりかけたルイだが、今は敵であることを思い、きつく問う。

「そう叫ぶな。響くんだ、ここは。」

などというクリアだが、ルイたちの目を見て、すぐに改める。

「何をしている、か。見たまんまなんだが。街の占拠騒ぎは、私が原因だ。他に、聞きたいことは？」

あっさり答えたクリアに、二人は動揺を隠せない。

「なぜ、そんなことをした！」

叫ぶな、と言っているのに叫んだルイには突っ込まず、こう返す。

「それは、話すと長くなるから、話せない。いや、話すとおの人のことも話さねばならなくなる。それだけは、できない。」

「あの人・・・？」

ルイは、それについても聞きたいのだが、答えてもらえないと見ると、別の疑問を投げかける。

「なぜサン・ドミノを抜けた！今までどこにいた！？」

洞窟と松明はよく似合うものなのです。(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4321u/>

サン・ドミノ

2011年11月16日21時16分発行